

2024年2月2日

パルシステム生産者・消費者協議会

次世代リーダー研修実行委員長 王隠堂 正悟哉

2023年度第3回次世代リーダー研修報告

- (1) 12/6・7 (水・木)、パルシステム連合会東新宿本部にて20産地29名、パルシステム関係者15名、事務局等3名の総勢47名参加のもとで、2023年度第3回次世代リーダー研修が開催されました。
- (2) 1日目は、飯泉一茂実行委員 (JAつくば市谷田部産直部会) の進行、宇都宮幸博実行委員 (無茶々園) より開会挨拶をいただき、ローカルSDGsにつながる取り組み事例報告として、岡田祐樹氏 (エコたまつくり)、佐藤清志氏、安田盛男氏 (首都圏とんトン協議会小川ファーム) より「粃殻を活用した耕畜連携」の報告、渡部さと子副代表幹事より「農商工消連携の取り組み～つながるひろがるゆめ納豆～」の報告がされました。
- (3) 続いて、7つのグループにて、「パルシステムと産地による取り組みの形を考える」をテーマにディスカッションが行われました。
- (4) 2日目は、金井修己実行委員 (沃土会) の進行により進められ、研修卒業生より次世代リーダーへのメッセージとして、柳沢恵理実行委員より、「これまでの参加で、自分自身の変化と気づきを発見できるようになりました。自組織の説明をする機会も多くなり、自組織の理解と自分事としての意識が芽生えました。自分の考えを自由に発言でき、受け止めてくれる仲間がいる場はすばらしいことですし、リーダー研修は例えればスルメのように何度も参加を重ねる事で味が出るものです。この研修で得た仲間との絆はかけがえのない関係性であり、この研修を自分の糧にしていきたい。」と呼びかけられました。
- (5) 続いて1人1分スピーチとして研修生のこれからの夢や決意などがされ「仲間づくりを広げたい」「初めてのことばかりだったが世界が広がった」「パルシステムとして産地とつながるためにまだやれることがある」「将来に語り継がれる商品を作っていきたい」「他の参加者の熱い想いに感化された。当事者として何をできるか考えていきたい。」などの発表がされました。
- (6) 今回は、最終回ということで、「ローカルSDGsを学び、パルシステムと」をテーマに7グループでのグループディスカッションを中心に最後の意見交換を行い、終了後、各グループ代表者より以下の内容が報告されました。

1 グループ

ローカルSDGsは地域が持続するための活動であり、人材育成、環境保全、暮らしを守るために魅力ある農業と産業を育成すること、地域の中でのつながりを深め魅力ある地域づくりをすることが未来へ繋がる。

2 グループ

パルシステムでしかできない関係性を追求すると農商工消連携になるのではないか。ローカルSDGsは農業など自らの分野を続けていき、無理の無い範囲で続けていくことが重要。

3 グループ

ローカル SDGs は地域の話ではあるが、パルシステムの関係性を活用して、食べることでつながることを大前提に、生産現場での資源循環に繋がるのではないかと。そして人と情報を循環させるために産地間での情報交換をおこなうことも重要だが物流的な課題が生じる事もある。マッチングする機会を増やしていくことが重要。

4 グループ

資材高騰などがこの先も続いていく中で、ローカル SDGs の取り組みは既に各産地で行っていること。その中で「美味しいね。いただきます」をテーマに生産者として出来る事は、有機肥料や加工残渣の活用など持続可能な農業を続けていくことが大切であり、情報の輪を広げる事と島根や全国にパルシステムを広げていくことが重要。パルシステムとして出来る事は、商品の想いを伝える事や、生産者と消費者をつなげることが何より大切。今回の出会いからメンバー間での更なる情報共有の仕組みづくりとして是非とも生消協事務局にて 2023 年次世代リーダー研修生のグループ LINE を作ってほしい。

5 グループ

ローカル SDGs のローカルの部分で、身の回りを自分の仲間、家族を意識した。地域の交流を考えると祭りなどにより人の輪で交流を深める事が、防犯にもつながり眠っている資源の発掘や、景観の維持にもつながる。居場所づくりの面では、家族のいない方も含め子ども食堂などで交流を行いお互いの課題を発見し、世の中に貢献する場を提供することで生きがいに繋がる。ローカル SDGs の目的として、立場も課題も違う人たちが出会い知ることによって新たな気づきに繋がること。消費者も商品の上流にある流れを知る機会があれば世の中が変わるのではないかと。

6 グループ

おのおのが当たり前に来てきたことがローカル SDGs のに繋がることに気づかされた。農商工消の関係性の考え方の中で、農の面では減農薬や地域資源や農業副産物の活用や、異常気象など先が見えない中で産地間の情報共有が重要であること。商の面ではモズクによる基金化とサンゴの再生による社会意義のある商品づくりと生産地を理解し盛り上げる企画などが重要であること。工の面では、規格外品加工や加工残渣の畜産活用などがある事。消の面では交流や 3R、消費者が選び次につなげるために、意識を高める事が重要である。

7 グループ

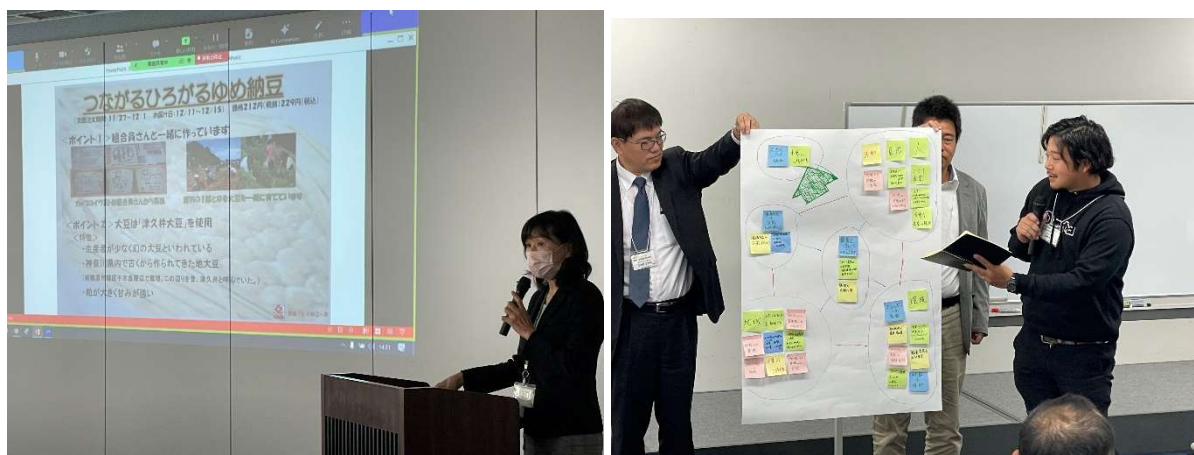
パルシステムと産地の取り組みを可視化した。パルシステムではすくすくパン豚など地産地消の商品の取り組みがあり、産地では稲わらの畜産活用や食品廃棄物を活用したぼかし肥作りなどの取り組みがある。周りを見渡すことによって他業種や地域とつながりを築く事が需要。

- (7) 全ての報告後、小川代表幹事より講評が述べられ、「地消知産の概念で地域で必要なものを地域で作っていくことがこれからのローカル SDGs ではないかと。立場の違いや簡単には出来ない情勢ではあるが、少しでも共感できることがあれば実現に向けて交流と相互理解によって、当事者として打開していくことが必要ではないかと。次世代リーダー研修は回を重ねて成長する。これからも産地の中でも仲間づくりを進めてほしい。」と呼びかけられました。

(8) 閉会の挨拶では、王隠堂実行委員長より「ローカルSDGsをテーマとして進めてきたが、今日の発表を受けて、自産地の事、まわりの事、仲間の事を回を重ねるごとに考えるようになってきた。10年先にリーダーとなったときに、この仲間でパルシステム産直を盛り上げていただきたい。」とよびかかえられ閉会となりました。

(9) 全3回の次世代リーダー研修終了後、第7回次世代リーダー研修実行委員会が開催され、次年度の実行委員会については2023年4月に選出された実行委員メンバーおよび、2023年の研修生より選出を進めることが確認されました。なお、実行委員会については、その後の生産者運営委員会にて、次期実行委員への宇都宮委員、長谷川委員の選出と、次期担当幹事1名については王隠堂実行委員長に一任することが確認されました。

以上



渡部副代表による農商工消連携報告の様子 2日間のディスカッションを経てグループ発表

